

各社の考え方

□ 算定を行う背景・目的

- グローリー環境ビジョンの実現に向け環境保全の「意識」をベースに「製品」、「事業」の両面でCO₂削減に取り組んでいる。
- 製品のLCA評価を継続実施している。スコープ3を算定し「見える化」を図ることで製品開発におけるライフサイクルでのCO₂削減の重要性認識が深まる。
- ステークホルダー、社外調査において情報開示が求められている。

□ 算定結果の活用方法

- サプライチェーン全体で温室効果ガス排出量の削減に取り組むにあたり、優先付けを行い効果的に活動を推進するために活用する。
- 外部からの企業評価に対する回答や、ホームページなどに算定結果を公開することで環境活動のPRに活用する。

2013年度 スコープ別のCO₂排出量

	CO ₂ 排出量	割合
スコープ1	3,973 t/CO ₂	0.9%
スコープ2	13,072 t/CO ₂	3.0%
スコープ3	424,272 t/CO ₂	96.1%
合計	441,317 t/CO ₂	100.0%

<http://www.glory.co.jp/csr/environment/activity.html>

□ 算定のメリット

- サプライチェーンの中でどのカテゴリーの負荷が大きいのか、その削減ポテンシャルはどのくらいあるか、明確化できる。

□ 社内の算定体制

- 本社の品質・環境推進部が全社環境委員会を通して算定目的の共有化を図り、関連会社、関連部門から必要な情報を収集し、グループも含めた全体の集計を行っている。

各社の考え方	
<p>□ サプライチェーン排出量の削減に向けて</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 製品の省エネ、及び部品点数、製品重量の低減を進め、CO₂排出量削減の取組みを推進する。 <p>製品使用時のCO₂排出量を2030年に2005年比30%削減することを長期目標に掲げ、環境配慮型製品の開発に取り組んでいる。</p> <p>また、製品アセスメントやLCA評価を通し、ライフサイクルでのCO₂削減を推進しており、環境性能の自社基準を満たした製品を「G-エコ製品」として認定している。「G-エコ製品」の開発、販売比率を高めサプライチェーン排出量を削減するために具体的な目標を環境中期計画に盛り込み活動を推進している。</p> <div data-bbox="1381 485 1796 892" data-label="Image"> </div> <p>使用時のCO₂排出量を当社従来製品より28%削減</p>
<p>□ サプライチェーン排出量算定の課題</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● 排出量比率の大きいカテゴリーの算出精度の向上とバウンダリの海外分への拡張 (カテゴリ1, 2, 4, 11など)

3

グローリー株式会社

カテゴリ	算定方法	
	活動量	原単位
カテゴリ1「購入した製品・サービス」	● 自社が購入・取得した製品、サービスの金額	● 原単位データベース*
カテゴリ2「資本財」	● 設備投資額	● 原単位データベース*
カテゴリ3「Scope1,2に含まれない燃料及びエネルギー活動」	● 購入した燃料・電力の物量	● 原単位データベース*
カテゴリ4「輸送、配送(上流)」	● 輸送トンキロ	● カーボンフットプリントコミュニケーションプログラム 基本データベースver.1.01
カテゴリ5「事業から出る廃棄物」	● 廃棄物処理業者への委託量	● 原単位データベース*
カテゴリ6「出張」	● 交通費支給額	● 原単位データベース*
カテゴリ7「雇用者の通勤」	● 通勤手当支給額	● 原単位データベース*
カテゴリ8「リース資産(上流)」	● 賃借している建築物(倉庫)の床面積	● 原単位データベース*
カテゴリ9「輸送、配送(下流)」	※対象から除外	—
カテゴリ10「販売した製品の加工」	※対象から除外	—
カテゴリ11「販売した製品の使用」	● 製品電力消費量、製品寿命、販売数量	● 電気事業者別のCO2排出係数(2012年度実績)の代替値
カテゴリ12「販売した製品の廃棄」	● 製品重量、年間販売台数	● 原単位データベース*
カテゴリ13「リース資産(下流)」	※対象から除外	—
カテゴリ14「フランチャイズ」	※対象から除外	—
カテゴリ15「投資」	● 投資先のScope1、2排出量、投資持分率	● 投資先が用いた排出原単位

原単位データベース*; サプライチェーンを通じた組織の温室効果ガス排出量等の算定のための排出原単位データベース(ver.2.1)

算定結果

